教育美術・佐武賞 選考を終えて

公益財団法人教育美術振興会
教育美術・佐武賞　担当理事
橋本 光明
信州大学　名誉教授

選考は，４～５月の２ヵ月間に亘って行われます。この期間中，選考委員は応募論文・報告の１点１点について時間を掛けて査読します。選考会では委員が互いに隣り合い，顔を合わせて意見を交わします。議論が熱を帯びたり，互いの意見が一致したりした時に感じる特別な空気の流れや雰囲気などは，言うまでもないことですが対面の会議ならではのことです。

新型コロナ感染リスクの減少によって昨年度から対面による選考会を再開しましたが，各委員の間隔は１メートル程離れていました。本年度はコロナ禍前の 2019 年の選考会の座席に戻したことで５年ぶりに元の状態で開催されました。

本選考会の特色の一つとしてゲスト選考委員を交えた審査が行われています。特定の分野において専門知識や経験等を有するゲストの発言によって意見の幅と深みが増し，新たな情報の共有が進むことがあるなど言葉では言い尽くせない役割を果たしています。この点からもゲスト選考委員をはじめ各委員の座席の距離が縮まったことで意見の交換や意思の疎通がより円滑に行われることになりました。

今回のゲスト選考委員は，立命館大学の西村拓生先生です。先生の温かみのあるお人柄にふれ，場の雰囲気が和む中で闊達な議論が行われました。先生からは，最終選考に残った論文について実践研究の核心となる大事な部分を，授業者や学習者の視点などからの貴重なコメントをいただき多くのことを学ばせていただきました。大学の美術の講義等で取り上げられる F. シラー，R. シュタイナー等をはじめ芸術の教育的役割などについてご指導いただく機会が設けられることを願っています。

今回，選考委員が査読した応募論文は 10 点です。関東甲信越，東北，北海道の各地区からの応募が多かったこと，設置者が異なる国公私立の小・中・高等学校からの幅広い応募があったことが今までとは違うところです。応募回数が７回目の教員が２名いらっしゃいました。多忙な毎日を送る中で授業を通して児童・生徒の向上や成長を一緒に感じ合いながら，共に成長しようとする教育的愛情や情熱，使命感等がなければ長期間の実践研究と応募を続けることはできません。

複数回応募した他の方々も優れた実践研究を提示しています。今後も継続的な研究や新たなテーマでの実践による応募を期待しています。

一方，はじめて応募した実践研究の割合も多くなり本賞の注目度や関心が高まっていることが推察できます。この理由の一つに，実践の汎用性や一般化が考えられます。教育美術・佐武賞と，この賞に準ずる佳作賞を受賞すると，本月刊誌『教育美術』に掲載されて実践内容や方法，成果等が全国の読者の目に留まり関心が集まります。現在は，ホームページの「過去受賞論文」に載りますからさらに多くの人が閲覧できるようになりました。

これがきっかけで興味や刺激を感じる側から次は発信者側の立場になって研究課題を設定し，その改善策や解決方法を検討する気持ちが沸いてくるとの声を聞くようになりました。なお背景には，信頼性やこれまでの実績など教育美術・佐武賞を価値づけるものがあることも影響しています。

第 59 回教育美術・佐武賞の受者に長野県伊那市立伊那中学校教諭の小山美香子氏が選ばれ，佳作賞は東京都練馬区の山崎学園富士見中学校高等学校教諭の杉原誠氏に決まりました。お二人の実践研究は，本誌を通じて全国に発信され，ウェブサイトで広がります。

受賞論文は，個人や学校現場ばかりでなく大学や大学院で活用されています。そこで気を付けたいことは，使用する特定の用語や概念等について説明が求められることです。小山氏の論文では，研究テーマに取り上げた「現代美術」や生徒に紹介した書籍，代表的な作家とその作品などです。杉原氏の「デザイン思考サイクル図」や教育プロジェクトは，［注］で補説できます。

限られた紙幅ですから簡潔な説明になりますが，これにより読者の疑問や誤解等を少しでも解消して，共通の理解を持ちたいものです。他に「題材」でなく「単元」を用いた論文が複数ありました。専門用語の使用には，教科の特質や指導計画，教材等から検討し，場合によっては読み手の捉え方も考える必要があります。受信者ではなく発信者になるとさまざまなことに気が付きます。是非，発信を試みてください。　（はしもと・みつあき）

教育美術・佐武賞 選評

ゲスト選考委員
西村 拓生
立命館大学　教授

“美術”に根ざしつつ，“美術”の枠組みを超える，アートの力 —— 今回の教育美術・佐武賞の審査に参加させていただいた際に思い浮かんだ言葉です。

教育美術・佐武賞に選ばれた小山論文は，現代美術の理解という，いわばポピュラーな難問への取り組みを通じて，私たちの生活や社会における美術の意味をどのように捉えるのか，という根本問題にアプローチしていました。ポロック，カンディンスキー，モンドリアンに即した制作体験の設定，アーティストとのナマの対話，そして国語科と連携した「具体と抽象」をめぐる言葉の学び，いずれの実践内容も，生徒たちの感性と思考とを揺さぶり，深い学びへと誘うべく，巧みに設定されていると思いました。教科としての“美術”ならではの豊かな体験を基盤としながら，アートの意味をめぐる生徒たちの学びは学校の外へ，そして教科の枠組みを越え，自然と広がっていました。そのことを示す事例の示し方も的確で，説得力がありました。多くの実践者の手がかりとなる好論文でした。

佳作賞に選ばれた杉原論文の実践も，デザイン領域の特質を充分に踏まえつつ，学校の外との多様な連携のなかで生徒たちの学びが豊かに展開していく，スケールの大きいものでした。美術教育を通した「創造的思考力」の育成という課題が，実践者自らの緻密で包括的な研究の過程を通じて，アート・デザインの今日的・社会的な意義，という問題意識にまで深まり，その骨太な志が，生徒たちの多様で豊かな活動の設定を貫いていることが印象的でした。また，小山論文と同様，限られた紙幅のなかで生徒たちの学びの様子を的確に具体的に示し，実践の意義と成果を説得的に伝えている点も秀逸でした。

審査のなかで「現代美術」の定義が議論になりました。考えてみれば，小山論文に登場する三人のアーティストは，いわば「古典的現代」というべき不思議な（矛盾した？）存在です。彼らの時代には，たとえばハーバート・リードが『モダンアートの哲学』等で意気軒昂に論じていたように，アートの力が世界を変える，という熱がみなぎっていました。バウハウスのデザインも然り。それに対して，今は…。システムにがんじがらめにされた私たちの世界のなかで，そしてそのシステムの再生産に不本意にも奉仕させられている学校教育のただなかで，他ならぬ“美術”科に根ざしてアートの力をもう一度解き放ち，私たちの世界が変わっていく —— そんな希望と期待が，今回の佐武賞の審査体験を通じて，久々に呼び覚まされました。

（にしむら・たくお）

プロフィール

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程中途退学。博士（教育学）。奈良女子大学文学部教授・教育システム研究開発センター長を経て，2021 年９月より立命館大学文学部教授。専門は教育人間学・教育哲学・教育思想史。

主な著書に『教育哲学の現場 ―物語りの此岸から』（東京大学出版会，2013），『ハーバート・リードの美学 ―形なきものと形』（共訳と解説）（玉川大学出版部，2006），『「美と教育」という謎 ―プリズムとしてのシラー『美育書簡』』（東京大学出版会，2021）などがある。

佐藤 昌彦
福島学院大学短期大学部　教授

選考を通して，教育現場の問題を自分で発見し，それを自分で解決しようとする素晴らしい実践研究に触れることができました。各実践研究の優れている点を以下に記しました。

教育美術・佐武賞の小山美香子氏の実践研究は，美術教育はもちろんのこと教育全体の基盤となる指導者としての責任について学ぶことができるものです。「生徒たちにどのような種まきができるだろうかといつも考える」という筆者の言葉からは自らの授業に責任をもつ指導者としての思いが強く伝わってきます。そうした思いがあるからこそ，今回のような鑑賞に関する優れた実践が生まれたのでしょう。佳作賞の杉原誠氏の実践研究は，指導者自身が美術の教科としての本質を問う重要性について学ぶことができるものです。根本・本質・原点への眼差しは時代を超えて大切にしていく必要があります。「美術という教科が持つ本質的な意味や価値を問い直し，創造的思考力を育むためのデザイン領域での学びの在り方の見直しを図りたい」という筆者の思いは，近隣の美術館や和菓子店との連携など，生徒が直接に社会と繋（つな）がる授業の実践に発展しました。

教育美術・佐武賞及び佳作賞には至りませんでしたが，次の三つも魅力的な実践となっています。鎌田純平氏の実践研究は，表現に対話を導入する授業の有効性について学ぶことができるものです。ピオルコフスキー潤氏の実践研究は，芸術祭の企画・運営を通して，児童が主体となって活動するための具体的な取組について学ぶことができます。三浦真奈美氏の実践研究は，小学校高学年の造形遊びに関する課題の解決へ向けた授業の在り方について学ぶことができるものです。

さらに以下の実践にも惹（ひ）きつけられました。山口県の先生の授業は，他教科や地域と連携する質の高い取組となっています。新潟県の先生の実践は，生徒の立場になって授業を改善する意欲的な取組です。青森県の先生の実践からは，生活や社会との関係を重視した手立てについて学ぶことができます。東京都の先生の実践は，低・中・高学年における指導のポイントについて学ぶことができるものです。山梨県の先生の実践からは，生徒の成長を温かく見守る指導者としての姿について学ぶことができます。

自分で問題を発見し，自分で解決策を提示する。その姿勢は日本の教育や社会をよりよくするための原動力です。他人事ではなく，当事者としての意識をもち，責任を回避せず，自分の頭で考える。教育美術・佐武賞の大きな意味の一つがここにあります。

（さとう・まさひこ）

鷹野　晃
山梨県北杜市立明野中学校　元校長

思い通りにならないのが授業。そこにリアルがあります。佐武賞を受賞された小山美香子氏は，日々子どもたちと接する中で，課題を感じると，ただちに手立てを考え，他の教科をも巻き込みながら施しています。その幅広い実行力に，大いに学ばせてもらいました。さらに，ある生徒の言葉がまとめに紹介されていました。子どもの言葉に思わずはっとさせられることも，授業の実際です。小山美香子氏は，そんな言葉に出会い，心を震わせているのがわかります。実践者の目の前には子どもたちがいます。彼らと過ごし，眼差しを交わし，心の鼓動を分かち合っているのです。こんなかけがえのない現実こそ。教育現場に身を置く皆さんの強みなんだと思います。アンケート結果の数値化も大切です。ですが，あなたが心を揺さぶられた，授業後にふと聞こえた子どもの，たった一つのあのつぶやきに着目するのもいいのではないでしょうか。他の応募の中には，論文だからと必要以上に冷静を装う論調がみられました。子どもの感動，自身の感動に，もっと素直でいいのに… と歯がゆく思うものもありました。

山梨はワイン県です。さまざまなコンテストで「金賞」はもちろんですが，「銀賞」のワインに多くの注目が集まります。なぜなら，個性的で刺激があり，学ぶところが多いからです。まさに「佳作」の杉原誠氏の実践がそれに当たります。美術を学ぶ必要性をデザインの領域に特化し，明確にしようとする姿勢が素晴らしかったです。デザインは，他者の意識に重きを置いた表現活動です。そのなかで，いかに生徒が「わたし」を生かし，実現させていくのか，悩む先生方も多くいます。杉原氏なら，さらに追求し示してくれそうだと，期待が膨らむ学びの多い実践でした。

生徒の声を聞くことは，実は思いの外，難しいものでもあります。指導者の思いが強すぎると，都合よく聞こえたり，間違って聞こえたりしてしまいます。「役に立ったか？」と問われれば「役に立った」と答えるのが子どもです。これらをどう乗り越えるのか，教育実践につきまとう課題です。

また，研究大会などで取り組まれた実践の応募は，そのままでは「未発表」とはなりません。ですが，大会で討議され，指摘されたことをさらに改善した実践はどうでしょう。「その後」の実践は発表する機会がないですね。大会に向け，せっかく多くのエネルギーを費やして創り上げた貴重な実践です。さらにバージョンアップしたうえで，この佐武賞に応募し，実践の「仕上げ」としてはいかがでしょうか。

（たかの・あきら）

第59回　教育美術・佐武賞　選評

直江 俊雄
筑波大学　芸術系教授

全国の教師の仲間たちに「自分もまた子どもたちと，新しい美術教育の実践に挑戦しよう！」という情熱を湧き立たせるもの，それが教育美術・佐武賞だと思います。選考にあたって，私自身が美術の教師として目を開かされるもの，美術教育の素晴らしさを再発見できるもの，その授業での工夫に魅せられるもの，子どもたちの学ぶ様子が生き生きと感じられて教室での実践に飛び込んで行きたくなるようなもの，などの観点を重視しました。

教育美術・佐武賞に選ばれた小山美香子氏の文章は，一連の授業実践の紹介が簡潔で魅力的であることに加えて，「言葉と美術は最初から一体化している」とのコンセプトが一貫していて主張が明確に伝わってきます。授業実践を行う中での教師自身の芸術観の深まりへの言及などを通して，美術教育実践の価値を鮮やかに描き出すことに成功しています。細部の説明を適度に省いて，読みやすく，読者の心に響く文章にまとめた力を賞賛します。

佳作賞の杉原誠氏の文章は，生徒たちが社会的な文脈の中で，より深く問うことのできる場面をつくり出すデザインの学習を，様々なアプローチを総合してつくり出す質の高い実践を着実な基盤としながら，制度論など大きな視点からの論考に発展させており，また実践そのものに対する筆者の考察も傾聴に値します。

鎌田純平氏の文章は，調査研究として，周到に準備し系統立てて実践し，その成果を記述している点が賞賛に値します。表現の構想段階における学習者間の対話の効果を測定しようというのは興味深い着眼点であり，今後の研究の進展に大いに期待します。

ピオルコフスキー潤氏の文章は，児童たちがつくり上げた素晴らしい芸術祭の取り組みが伝わってくるものでした。こうした優れた成果を子どもたちが発揮するまでに，教師と児童たちは様々な苦労，工夫，葛藤を乗り越えられたのではないかと想像します。

三浦真奈美氏の文章については，造形遊びの問題点について総合的な観点から向き合い，空間意識の変化という測定困難な現象を明らかにするために，授業における児童たちの変化を詳しく検証しようとした点を高く評価します。

教育美術・佐武賞の読者は仲間の教師たちです。私もその一人として，応募作品を読んで力強く鼓舞されました。仲間に語りかけるような調子で，彼らの心の中に眠っている美術教師としての魂を揺さぶる言葉で，実践記録をもとに客観的にわかりやすく，書き綴（つづ）ってはいかがでしょう。その言葉の力が，全国の教師の心を動かし，日本の美術教育に力を与えます。次回の受賞作を読むのを楽しみにしています。

（なおえ・としお）

東良 雅人
京都市立芸術大学　客員教授

社会が激しく変化し，教育現場ではこれまで以上に「何を教えるのか」から「何を学ばせるのか」を重視した授業づくりが求められています。こうした，いわゆるコンテンツベースからコンピテンシーベースを起点とした授業改善において重要なのが教師の子供たちへの想いと教科等に関する研究です。

審査に当たり，応募された全ての論文等からは次代を担う子供たちに“今，何を育むことが必要なのか”，また，“それをどうやって子供たちに身に付けさせればよいのか”ということを日々考え，真正面から実践に取り組んでおられる姿が感じられました。今回，講評に先立ち，まずは応募していただいた全ての方々に敬意を表するとともに，日々誠実に子供たちの学びに向き合っていただいていることを感謝いたします。

教育美術・佐武賞を受賞された小山美香子氏の論文は，まさに子供たちへの想いや願いを研究のスタートラインとし，鑑賞教育の本質について研究を深めたものでした。鑑賞の活動において，定まった価値を知ることや評論家の論評等を自身に重ね合わせることが鑑賞であると考えている人は子供だけで無く大人にもよくある話です。本研究は書籍をベースにしており，論文に書かれている「現代美術」の解釈ついては議論もあろうかと思われますが，ともすれば難解と思われがちな抽象絵画の鑑賞における正解主義や同調圧力からなんとか子供たちを解放していこうという姿には素晴らしいものがあります。また，現行の学習指導要領の趣旨やねらいの実現に向けて，題材の内容のまとまりを見通して「主体的・対話的で深い学び」の実現を意識した学習活動や「造形的な見方・考え方」が働くように追体験と鑑賞を関連させた授業を展開していることも評価できる点でした。

佳作賞を受賞された杉原誠氏の論文は，美術科として「創造的思考力」を社会とのつながりを意識した新たな意味や価値を創造する力と定義し，外部のデザイン思考サイクルを活用し，新たな授業づくりに取り組んでいます。このことは，これまでの結果重視から過程重視への転換であり，まさに子供の学びを重視した授業づくりへの転換と言えるでしょう。

これからの時代，子供の学びを起点とし，学習活動の内容と育成する資質・能力の関係を明確にすることや，子どもの自主性の尊重と教師による指導との調和をどう考えていくのかが重要となってきます。そしてそれを支えていくのが教科研究です。そうしたこれからを担う研究や実践が今後も教育美術・佐武賞に多数応募されることを心より願っています。

（ひがしら・まさひと）

細谷 僚一
京都デザイン＆テクノロジー専門学校　校長

今回，教育美術・佐武賞を受賞された小山美香子氏の研究主題は，難解とされている抽象絵画や現代美術についての理解です。国語科との教科横断的・相乗的な学びや Chromebook を活用して生徒自身が抽象絵画や現代美術について調べ，学習を深めるという今日的な教育活動の在り方を積極的に取り入れています。さらに，学びの協働性を基調に鑑賞活動を通して学んだことを表現活動（追体験）につなげたり，学びの成果を共有するための相互鑑賞や個々の生徒のプレゼンテーションを行ったりして理解をより深めようとされています。何よりも本文にちりばめられた学習過程での生徒の感想文は授業の様子を知るだけでなく，生徒たちの胸の高鳴る姿がありありと目に浮かんできます。

佳作賞を受賞された杉原誠氏は，これまでのデザインにおける指導が技能に力点が置かれがちであったという反省をもとに生徒自ら生活や社会を振り返り，課題を見つけ新たな意味や価値を生み出すことを追究されています。つまり，激しく変化する時代を生き抜くために未来社会を構築する「創造的思考力」の育成を目指した授業を展開されています。その特徴は学校外の組織や団体，企業との連携であり，生徒自身の文化的・社会的実践としての作品づくりにあります。

選外で印象に残った実践研究を取り上げてみたいと思います。１点目は製作過程における児童の「造形的な語り」に耳を傾け，それらに柔軟に対応した指導によって多様で豊かな表現を目指す試みです。その手法の一つとして取り入れられているのは，制作過程の作品を展示することによって，自然発生的な「造形的な語り（自己評価・相互評価など）」の促しです。２点目は新学習指導要領において小学校高学年における造形遊びに書き加えられた「空間」の解釈とその解釈にもとづく実践化です。とりわけ中学年と高学年の空間意識のデータ分析は興味を引かれます。小学校において今も造形遊びの定着が不十分という現状を踏まえると，先行研究をもとに造形遊びの趣旨を再確認することは大切なことです。３点目は学校として「未来創造」の研究開発を進める中で「芸術祭」を企画し，ワークショップを取り入れるなど臨場感のある参加型実践についての論述です。

図画工作科や美術科がこれからの時代に求められる課題解決能力や創造性などを育む教育であることを内外に発信していきたいものです。その発信基地の一つがこの「教育美術･佐武賞」です。60 回を迎える次回において，数多く応募されることを大いに期待しています。

（ほそたに・りょういち）

第59回教育美術・佐武賞本選会終了後に撮影
前列左より西村貞一理事長，西村拓生先生，橋本光明理事
後列左より佐藤昌彦先生，鷹野晃先生，細谷僚一先生，直江俊雄先生，東良雅人先生

第59回教育美術・佐武賞を迎えて

教育美術･佐武賞は今回で 59 回目を迎え，全国の先生方から，10 件の実践論文をご応募をいただきました。審査の結果，教育美術・佐武賞に小山美香子先生，佳作賞に杉原誠先生の論文が選出されました。お忙しいなか実践をまとめ，お送りいただきました先生方，そして真摯な審査にご尽力いただいた選考委員の先生方に，心より感謝申し上げます。

当会では，受賞論文を誌面で発表するのみならず，第 48 回（2013 年）からは贈賞式を開催し，受賞された先生方を顕彰するとともに，受賞者と選考委員の先生方による座談会を設け，論文に込められた「思い」も紹介してまいりました。

2022 年からは，過去の受賞論文の一部を当会ホームページで公開し，先生方の授業研究に活用していただく取り組みも始めております。これからも本賞が契機となり，学校現場での実践研究が活性化することを願っています。

令和 7 年度は第 60 回という節目の年を迎えます。より多くの先生方からの，意欲あふれる実践を心よりお待ちしております。

公益財団法人 教育美術振興会
理事長　西村 貞一

教育美術･佐武賞　受賞者一覧（2013 ～ 2024）

	賞	表題	執筆者	受賞時勤務先
第48回（2013年）	佐武賞	主題を生み出すための鑑賞指導	横山 君子	長野県
	佳作賞	発想を広げ、構想力を深める美術教育についての一考察	大町 香織	北海道
第49回（2014年）	佐武賞	つくり出す喜びを味わうために地域性を生かしながら 試行錯誤できる題材の開発と手立ての工夫	津端 朝宏	新潟県
	佳作賞	肢体不自由特別支援学校における〈楽しい美術〉の授業実践	森田 亮	千葉県
	佳作賞	東日本大震災と図画工作・美術教育 ― 2011～2014 きぼうのてプロジェクトから ―	柴﨑 裕	東京都
第50回（2015年）	佐武賞	人とのつながりをつくりだす版画教育 ～子ども同士のかかわりによる造形思考を生かした版画製作と 版画教育を通して子どもと社会をつなぐ「地域連携」～	上北図工部会 川村 英徳・野坂 佳孝	青森県
	佳作賞	学校から地域そして未来へ ― 小学校・第６学年 「つながろう～アートを通して広がる世界・広がる生き方～」の実践から ―	黒井 美智子	新潟県
第51回（2016年）	佳作賞	肢体不自由児が“自分でできる”美術の授業づくり ―《美術の実態表》と《目標の段階表》による、 個別の題材目標と手立ての設定を方策として ―	森田 亮	千葉県
	佳作賞	子どもの心の安定をめざした図画工作科 学習指導 ～セルフイメージを高揚させるための造形活動を通して～	横田 恭典	福岡県
第52回（2017年）	佳作賞	美術を愛好する心を育てる美術教育のあり方 ～地域活性化アートイベントと学校現場の連携を通して～	井手 淑子	長崎県
	佳作賞	熊本の子どもたちに図画工作科ができること ～イノベーション力を育む一年生の色彩指導～	本山 和寿	熊本県
第53回（2018年）	佐武賞	生活の中の芸術と関わり、表現活動を通して楽しく豊かな生活を創造する 題材の開発と手立ての工夫	古家 美和	兵庫県
	佳作賞	子供の成長を支える美術教育の実践 ～「マイ・イソップ物語」の制作と鑑賞活動から～	潮木 邦雄	静岡県
第54回（2019年）	佳作賞	造形的な見方・考え方を働かせ、自分らしく表現する生徒の育成 ～造形的な視点に基づいた思考の力を高める指導過程の工夫～	宮田 栄子	岐阜県
第55回（2020年）	佐武賞	美術がつなぐ、子ども・地域・学校 ～学校現場が模索した教科融合型学習の試み～	永松 芳恵	大分県
	佳作賞	表現力を高めるための「対話的な活動」の工夫 ― ピクトグラム制作を通して ―	岡本 真梨	新潟県
	佳作賞	「深い学び」に繋がる中学校美術科の授業 ～造形要素と制作過程を軸にした授業改善と実践～	堤 祥晃	滋賀県
第56回（2021年）	佐武賞	子供が絵に表す意味と指導のあり方に関する研究 ― 量的な基礎研究を根拠とした法則化による描画指導法の検討 ―	花輪 大輔	北海道
	佳作賞	生徒の主体的な社会参画意識と創造性を育む プロジェクト型学習カリキュラムの実践と検討	西澤 智子	香川県
第58回（2023年）	佐武賞	特別支援学級における，子供の「思いをいかす」環境構成の在り方と授業づくり	梶川 明子	山口県
	佳作賞	他教科領域や地域と連携し，子供がつくりだす喜びを味わう学習展開の在り方 ～コロナ禍で表す「海」と「いのち」～	村重 仁美	山口県
第59回（2024年）	佐武賞	現代美術とは何か？ ～現代美術を理解し，自分なりの解釈で語るための授業展開の試み～	小山 美香子	長野県
	佳作賞	創造的思考力を育むための学びの提言 ― 中学校の美術のデザイン領域に関する学びの在り方を考える ―	杉原 誠	東京都

※第51回、52回、54回は佐武賞は該当者なし。第57回は佐武賞・佳作賞共に該当者なし。